

心に響き、心を耕す道徳科授業

～自信と誇りをはぐくむ道徳科授業のために～

後藤 忠

1 「道徳科」の可能性と限界を踏まえ、可能性を広げる

- ・ 指導したことは必ず身につくものだと思っていないか？
- ・ 「道徳科」万能主義に陥っていないか？

2 「道徳科」の特質と役割を理解する

- ・ ACの広告：「心」は見えないけれど「心遣い」は見える！ ⇒見えない「心」の充実を期す時間
- ・ 心を教材に映し、それをことばにして伝え合う時間
- ・ 自信と誇りをはぐくむ時間

3 「よりよい自分づくりをめざして、自己を深く見つめる授業」のための5か条

第1条 自由な雰囲気のある学級づくりに努める

- ・ 一人一人の発言を大事に扱う
- ・ 一人一人がきちんと認められている学級の雰囲気がある
- ・ 必要な秩序の上に自由は成り立つ

第2条 子供が本来もつよさを引き出すという指導観に立つ

- ・ ヒントの与えずぎ、手の打ちすぎは児童のよさをつぶす（価値の注入、押し付けは厳禁）
- ・ 児童が自分でよりよくなろうとする心の動きに対し、的確に援助する
- ・ 授業で一番大事なのは「きっかけ」を与えること
- ・ 期待する発言に出合ったときだけうなずく教師になるな

第3条 教えるのではなく心を耕す指導に努める

- ・ 気づかせ、自分を見つめさせる。知らなかった自分を発見させる
- ・ できるできない、わかるわからないを問題にするのではなく、自分を深く考えることができれば、それが『心の耕し』になる

第4条 脱・即効性

- ・ 指導したことを即行動に結び付けようとする妄想にとらわれてはならない
- ・ 今までより少しだけ自分を深く見つめることができるようになる ⇒これが道徳性の高まり

第5条 教師もありのままの自分を語る開放性をもつ

- ・ 教師も人間として発展途上中。教えるという意識ではなく、子供とともに自分も高まっていくという姿勢が大事。まず自ら子供に心を開け